
隠人使い2 呪われし者

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠人使い2 呪われし者

【Nコード】

N8869N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

「呪われてるんだ。」そういつ同級生を前にした土御門 綾と藤宮 望はそれが陰陽道で解決するものか、それとも違うのか戸惑う。

巻(前書き)

はじめに・・・・・・・・

巻

ある日の放課後の出来事だった。

帰宅しようとする望と綾の前に同級生の新谷が現れ、

「俺、呪われているんだ。」

と、言った。

「……………」

「……………」

一瞬2人は絶句し、そして

「俺は『拝み屋』じゃない。陰陽道を司る『隠人^{おに}使い』だ。」

綾はそう言い、

「何かあったの？」

望はそう言った。

「1週間程前の事だけだ。」

新谷は望に視線を移し、「每晚誰かが来て、俺の首を絞めるんだ。」

「……………」

「首を絞める？」

「うん。そして苦しくて目が覚めるんだ。」

綾は2人の会話を傍観していた。

興味なさそうに涼しげな眼を伏せ、

「帰るぞ、望。」

竹刀が入った黒い袋と鞆を持つ。

「ちよつと待ってよ、綾。」

望は慌てて、「そんな事言わないで話聞いてみようよ。」

「医学的に見れば睡眠時無呼吸症候群だろ。」

綾がそう言うと新谷は慌てて、

「それはないよ。両親が心配して医者にも行ったんだ。それに夜

中に父さんに見てもらったんだけど。」

そこで一呼吸置き、「やっぱ変な黒いものが俺の上に被さってそ

の途端、俺が息出来なくなっただって。」

「黒いもの？」

望は小首を傾げた。「何だろうね、綾。」

「……………」

綾は目を細め、「そう言えば新谷。お前この高校と付属大学に入るためにこの近くに引越して来たって言ってたな。」

「ああ。土御門の言う通りだよ。」

新谷は頷いた。

その言葉を聞いた綾は、右手の親指を噛み何かを考えているようだった。

「どうしたの？」

望が尋ねる。

「新築じゃないよな。」

綾が新谷に尋ねる。

「うん。新築だけど5年は経っている。」

「……………様子を見よう。俺のテリトリーかそうでないのか。」

綾は鞆の中から一冊の黒い本を取り出した。

「ここに『方違え』が書いてある。」

「『方違え』？」

目を丸くする2人に、

「平安時代の貴族がやっていた事さ。その書を参考にして、今日は東へ行く予定があるけど陰陽によると東へ行くと災いが起こるから、一度西に向かってそれから南か北かのどっちかを周って、目的地の『東』に着く様にするのさ。」

「何か、ややこしいね。」

望がその本を覗き込みながら、「『今日は靴を右足から履く』だつて。」

「土御門。」

新谷は不安そうに、「そんなので利くの？」

「もし」

綾は彼の顔を見つめ、「その黒いものがお前に憑いているなら、陰陽道のやり方でやればお前に害を与えないはず。もしくは、陰陽の力によってお前から離れる。逆に家に住みついてるものだとしたら、今度は引越すればいい。」

「引越す？」

新谷は驚き、「そんな……」

絶句した。

綾は重ねて、

「先刻も言った通り、おれは『拝み屋』じゃない『隠人使い』だ。俺のテリトリーは陰陽道。それ以外をお前が望むのなら、俺じゃなくて他の坊さんでもガセ霊能力者でも呼ぶんだな。」

そう言っていると、本を渡しただけで新谷に背を向けてしまった。

「ごめんね、新谷君。」

望が慌てて取り繕う。「綾は本当の陰陽師なんだ。他の人にとっては、霊能力者とかと一緒にされちゃうけど、綾は違うんだ。綾の言ったやり方で、ちょっと試してみてくれない？」

「何してる、望。」

教室の前の出口で、綾が望に声をかける。

「置いて行くぞ。」

「今行くよ！」

望も慌てて鞆を持ち、「ごめんね、新谷君。何かあったらメールして。」

それだけ言い残すと、出口へと走った。

残された新谷はその陰陽道の本をじっと見つめ、

「とりあえず、やってみよう。」

若干肩を落とし、そう呟く。「土御門ならお被いみたいな事やってくれると思ってたのにな。」

今夜もその黒いものが現れるか心中は不安だった。

「綾っては何でいつもそうなの？」

望は綾のマンションで食事を取りながら、尋ねた。「いつもそうじゃん。誰かが困ってるのに他人のふりしてさ。」

「他人じゃないか。」

綾は望が作ったマトンのスープを飲みながら、「お前だって何でそんな他人の心配ばかりするんだ。」

「うん。」

ライスを手で望は首を傾げて言った。

「たぶん放つとけないタイプなんだよ、俺。医師を目指してるしさ、総合診療の。」

「だから一人一人に気を使ってるのか。」

綾は静かに答えた。

「綾だって」

望はにつこりと笑い、「未だに井上 遥の相談相手になってるじゃん。」

「それは……」

そう呟き、視線を望から離す。

「凶星っ！」

望はライスの白い皿を机の上に置いて、笑った。「綾も俺と同じなんだよ、きっと。だけど綾は表現の仕方を知らない……昼間の新谷君に対する態度みたいに。」

「余計なお世話だ。」

綾は溜息をつき、ライスにフォークを刺した。

「あ、スープのおかわり持って来るね！」

垣間見た綾の人間的な面に望は心の底で嬉しくなり、有無を言わず綾のスープ皿を取った。そのままキッチンへと姿を消す。

「余計なお世話だな。」

目を細め、綾は呟いた。

そこへ、

ガー　グアー

一匹の黒いカラスがベランダに舞い降りて来た。外はいつの間にか、雨が降っていた。

綾は机から立ち上がり、ベランダへと続く窓を開いた。

ガー　グアー

綾に何かを訴え、そして綾もそれに答える。

「猫か。」

雨音に消される程の微かな声で彼は呟いた。

「どうしたの、綾――雨!？」

スープを持って帰って来た望が外の様子に気付く。

「すまない、望。」

右手でカラスを撫でるとカラスは1枚の紙に変わって燃え消えた。

「ちよつと出かけてくる。」

「こんな時間に?外は雨だよ?」

「それでも」

綾は制服の上着を着ると、「待つてる奴がいるから。」

通りすがりに望にそう言つと、綾は玄関の扉を開け姿を消した。

き（後書き）

……… 本当にぼつぼつの更新です（――） 9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8869n/>

隠人使い2 呪われし者

2010年10月10日05時38分発行